# 鈴木商店の思い出（2）

## 神戸本店時代

中村元義

たつみ誌第三十一号を以って私の大里時代凡そ三ケ年の拙文を披露させて頂き誠に汗顔の至りに存じましたが私はあと一年で八十才になんなんとする人生の踏出しとして鈴木商店の約十三年間忘れることの出来ない、貴重な年月であり今回は神戸本店約一ケ年の勤務を簡略に述べさせて頂きたく存じます。本店人事課の辞令により大里から神戸本店へ大正六年、月日不詳に転任第一の印象として入社当時の栄町の店舗と余りにも相違し威容が堂々として眼前に迫り只唖然とする許りでした。先ず私に定められた席は倉庫部（主任宇野一夫氏）其の横に藤川寿一氏（神戸税関出身）更に右側の列に増田作之介氏向い合って伊藤小市郎氏、増田氏の横には今日たつみ会の幹事であられる中村勇吉氏、生地弘氏、東氏私は伊藤氏の右横であったと思います。他にも二十才前の若手十人位い記憶にある者中山氏、乾義隆、乾房美、藤川単二、藤井某等殆んど私と仕事上関連なかった。私の受持ちは増田氏が責任者で伊藤氏が実務担当の大阪日本商業会社が輸入各紡績会社へ売込んでいる棉花の受渡しであった。私はその助手として現場で受渡の実務を受持った。当時は棉花と言へども米棉を除き原棉其他は全部看貫渡しで私は増田様や伊藤氏の指図に従い神戸市内の各営業倉庫、例えば東神二菱、桟橋の遠いのは和田岬、東部埋立、本関周辺へ出掛けて各紡績会社専属の立会人と立会で看貫をしました。棉花と言え包装はまるで石のようにプレスしてあり一ベール確か三百か四百封度もあり、それを倉庫内で約十段位いに配付してあるのを看貫の為上段から一ベールづつ突落す訳です。そのとき棉埃と土埃が混合して倉庫内を朦々と立込めるそのときは暫く倉庫の入口から外へ退避する。私達立会人はタオルで口鼻を蒸し押さへカンカン帽を目深に冠り埃の少し静まる間暫く退避する有様でした。只辛抱出来たのは一日の受渡しが百俵か二百俵であった事でした。後に横浜で扱かった大豆、小麦のように数百から数千袋と言うのでなく短時間で済む事でした。偖以上棉花の仕事がない時は銑鉄、丸棟薄鉄板など造船材料でない問屋との受渡しも手伝う事がありました。又私は無関係であったが外米（蘭貢米、シヤム米、東京米）等も問屋との受渡しがあり看貫をして居たようで前記中山君が担当であったよう聞いて居ます。私は本店勤務約一ケ年位経って横浜支店へ転じましたが例の神戸の米騒動、本店が暴徒の焼打ちにあって全焼の報は暫らく我が耳を疑った訳ですが其の時の何かの報道で本店内の米穀係が問屋へ渡すべき外米何かの手違いで引渡しが出来ずそれは鈴木が米の出し惜しみをした為だ等大袈裟に宣伝され焼打の直接の導火線になったと、つまり暴徒の悪宣伝と思いますが殆んどの商品の保管や出入れは倉庫部の管理にあり或はそんな事もあったかと私の記憶の中に疑惑の侭残った訳ですが私が横浜へ転任後の事で此の辺で打切ります。

偖又次の思い出、或る日本店の玄関から入ってすぐ左へ廻ると一番広い部屋多分輸出入部だったと思うが誰か係の人が立話曰く「今日NYK上海線へ綿布のスペースを申込み昼迄座り込んで漸く5屯丈もらった」と之を聞いて大鈴木商店輸出部が僅か5屯のスペースしか得られないのか私が其の時感じたことは当時如何に輸出入貨物が激増しそれを輸送すべき船腹が絶対不足であったか、前任地大里の焼耐工場に居ては絶対判らぬのは当然と思った。只自分の視野が大きく開けたことを強く感じた。

右スペースの話は横浜へ転任後私の後を追うが如く本店から横浜へ転任せられた村元増衛氏で当時のスペースの不足状態を聞かしてもらって大変有難く思いました。

右船腹に関連する日米船鉄交換問題が惹起し大正六年八月以後仝七年十二月頃政府民間両面にて国家的大問題として米国大使モリス氏と再三接渉を重ね、中でも金子総支配人が川崎造船の松方社長と共に大いに尽力した事既に周知の事実、其の内何月何日かは判然とせざるも本店の何軒か西隣に或る会議所で演説会が催され誰でも聞きに行くようにとの事で私も行きました。

昭和43年４月２日祥竜寺の辰巳会供養塔の除幕式にて
北保、山下元徳、中村元義、佐野寿夫。

丁度其時、松尾忠次郎氏が開会の辞を宣べる所であった。そのとき思い掛なく金子様が聴衆に混って私の直く側へ近着き暫くして去って行かれた。私は金子様をこんな間近かに御目にかゝったのは入社以来全く始めて一寸どきまぎしましたが金子様は御気が付かぬ様子、其内遠ざかって行かれた。今日でも忘れられぬ瞬間の事でした。会そのものは大衆が詰かけて熱狂すると言う性質のものでなく金子さんと米国のモリスの間で大部分当方の希望通り妥結した事の報告であり先ずは万々歳だったように感じられました。

話は変りますが私は倉庫部の増田様、伊藤氏の側に居ましたが或日何処の誰であるか来客があり小柄で小太り若々しい人物が主として増田氏、中村勇吉氏、生地弘氏などと対談して帰へりました其の対話が如何にもテキパキ立板に水の如く本店三人の方々も其の対話振りに感嘆して居られました。私には何の関係もない鉄関係でしたので何処の誰か全然知りませんでしたが後日私が横浜支店へ赴任の結果前記の人物は横浜支店鉄材係山下元徳氏で然も私と机を並べることとなった。猶本稿では些さか余談になりますが仝氏と私は関東大震災前から東京支店に転じ新館三階に山下氏一階に私の席があり、寮は大井町（荏原郡蛇窪）の一つ屋根で昭和二年の最後迄起居を共にした永い永い交際であり特に横浜では一緒に写した写真が幾枚もあることを何時かの神戸の辰巳会で話したら山下氏は戦災で全部灰にした、焼増でよいから送って欲しいと言われ私は確か五枚位い原紙を送って差上げたら御自分の御住居で一人丈写したのを折返返し送って呉れました。

尚山下氏に関しては御話しも残りますが次号、横浜時代に書かして頂き、其の他も鈴木商店にとって複雑且つ多難に向いたるよう感じられました。何卒御一読下さることを祈ります。

終